昭和25年1月20日第三種郵便物認可
2016年3月25日発行（毎月25日発行）2月25日発売　第67巻第3号

芸術新潮

GEI JUTSU SHIN CHO

3 MARCH 2016

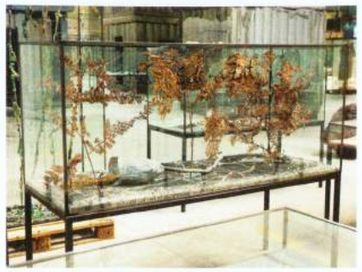
紀行特集
モンゴルの美しすぎる仏たち

15年ぶりの大展覧会を見る前に

特集 人殺し画家が描く"神の光"

カラヴァッジョをつかまえろ!

Paris



「アンゼルム・キーファー」展
2015年12月16日〜2016年4月18日
パリ、ポンピドゥーセンター

［左］アンゼルム・キーファー《回復》 1974年　油彩・エマルジョン・シェラック、カンヴァス　115×180cm
Photo: ©Atelier Anselm Kiefer

［右］アンゼルム・キーファー《土星の時》 2015年　ガラス、金属、粘土、アクリル、鉛、銅、樹脂、インク　152×180×70cm
Photo: ©Georges Poncet

死と再生のキーファー大回顧展

アンゼルム・キーファー（1945年生れ）の大回顧展である。初期の油彩から、水彩、本展のために制作されたインスタレーションまで、活動の全貌を伝える見ごたえのある展覧会になった。南仏バルジャックのアトリエにあった灰色の建物をポンピドゥーセンターの地下1階に再現し、展覧会への導入部とした。中には、古い写真を貼りつけた鉛のテープが乱雑に垂れ下がっている。

展示はテーマ別で、物議を醸したナチス式敬礼をする初期の自画像に始まり、森やゲルマン神話を題材にした作品、ナチス時代の建物を廃墟として描いた作品が続く。敗戦の年に生まれたキーファーは、ドイツ人にとって先の戦争は何だったのか、ドイツ人作家である自分はそれについて何ができるかを掘り下げた。その一つが《回復》［左］だ。瓦礫のたまった墓の上に天使のような羽のついたパレットを描き、芸術の持つ再生と覚醒の力を象徴的に表した。40のガラスケースに展示されたのは、80年代にドイツで制作した作品群。本展のため縮小サイズで再現された。《土星の時》［右］では、枯れたシダの下に鉛の肺が置かれ、地には銀色の川が流れている。サタニズム（鉛中毒）という言葉が示すように、土星（サターン）は鉛と錬金術に関係がある。鉛への傾倒と、錬金術が表す「別のものへの変化」も、キーファー芸術の鍵を握る要素だ。

作品の多くは廃墟や荒野をモティーフとするが、光も見える。死と生、そして再生の力。哲学的、思索的な傾向が年を追うごとに顕著になっている。

London

女性がテーマではない女性作家展

ギャラリー創設30周年を記念し、女性作家ばかり14人の作品を集めた初の展観。元妻への暴行歴があるオーナー、チャールズ・サーチ氏を果たしてフェミニストと言えるのか疑う向きもあるが、主催者側はそもそも〝ジェンダー〟に焦点を当てたのではなく、地位向上を阻む見えない「ガラスの天井」が存在することを指摘したいという。実際〝女性性〟をテーマにした作品が並んでいるわけではなく、「女性による優れた作品を展示すること」が展示の目的だ。「シャンパン生活」という展覧会名は、参加アーティストの同名の作品に由来する。成功した〝アーティスト〟は貧困生活から一転して特権と富（そしてシャンパンも!）を手にした人たちと思われがちだが、その実態は地味で孤独な作業の連続であることを示している。アリス・アンダーソンは、球形の《181キロメートル》［左の写真右］制作のため、その長さの銅製の糸を歩きながら巻くという厳しい作業を繰り返すうちに〝瞑想〟するような境地に至った。イラン生まれで英国で活動中のソヘラ・ソケンヴァリは、母国に関するテーマを暗示する作品を特徴とする。《モエ・サブ（緑の革命）》［右］は、高潔さを象徴する動物である馬の剝製を用い、2009年の大統領選挙で不正な選挙結果の取り消しを求めた抗議デモ運動を表現している。

ダミアン・ハーストなど、過去に当ギャラリーから羽ばたいたアーティストたちほどの衝撃性はなくとも、さらに作品を見たくなる良質な作家と出会える展覧会だ。

「シャンパン生活」展
1月13日〜3月6日
ロンドン、サーチ・ギャラリー

［左］アリス・アンダーソンの巨大なインスタレーション。左は《バウンド》（2011年）、右が《181キロメートル》（2015年）。
Image ©Steve White, 2015
Courtesy of the Saatchi Gallery, London

［右］ソヘラ・ソケンヴァリ《モエ・サブ（緑の革命）》（2011年）。09年のイラン国内のデモに触発されて制作された作品。
©Soheila Sokhanvari
Image courtesy of the Saatchi Gallery, London

取材=藤森愛実［マイアミ］　高橋恵理［ヴェネツィア］　羽生のり子［パリ］　内田さり［ロンドン］